中公文庫

洋菓子店アルセーヌ

ケーキ作りは宝石泥棒から

九条菜月

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

プロローグ　7
第一話　チョコレートムースケーキは万年筆から　19
第二話　ルビーの指輪と手作りカステラ　110
第三話　七つの贋作とクリスマスケーキ　204
エピローグ　239

洋菓子店アルセーヌ

ケーキ作りは宝石泥棒から

プロローグ

心地よいジャズの音色に、少し照明の落とされた大人の雰囲気を漂わせる店内。土曜日の、まだディナーには少しはやすぎる時刻。

浅葉陽咲は込みあげてくる激しい怒りにつき動かされるまま、拳をテーブルに叩きつけたくなったが、それを自制する程度の冷静な理性は残っていた。深く息を吸ってたかぶった感情をできるだけ落ちつかせる。

真正面に座るのは、つきあって五年目になる恋人の内藤聡史だ。年齢は陽咲と同じ三十歳。年相応の容貌だが、目鼻立ちのすっきりとした顔立ちはイケメンの部類に入るだろう。大川原商事に勤務する、陽咲の同期でもある。

一方、そのとなりに座るのは、大川原商事の受付業務を担当している、竹仲……名前はなんと言ったか。内藤が気遣うような声で「大丈夫か、真莉愛？」と話しかけたので、それが彼女の名前なのだろう。

百六十七センチと、身長の高い陽咲とは正反対の、小柄で思わず守ってあげたくなるような可愛らしい女性だった。服装も、パンツスーツの陽咲とは違い、ふんわりとしたシルエットのベージュのワンピースを着ている。

髪だって同じセミロングなのに、竹仲はいま美容室からでてきましたといわんばかりの完璧

なセットだった。対する陽咲は、美容室を予約する暇さえなく、パーマっけの薄れた髪を無造作に結っているだけ。それでもお気に入りのシュシュをつけ、せめて女性らしく装ったつもりである。

砂糖菓子みたいな子だな、と陽咲は荒ぶる心を押さえつけながら相手を値踏みした。年齢は確か、二十四歳。去年の春、入社したばかりだったと記憶している。

「陽咲にはすまないと思ってる。でも、真莉愛が俺の子を妊娠したんだ。だから別れてほしい」

「浅葉先輩、ごめんなさい。私が悪いんです。私が聡史さんを好きになったから……」

馬鹿じゃないのか、と陽咲は怒りを通り越して吐き気さえ覚えた。

気持ちが変わってしまうのは、悲しいがしかたのないことだ。内藤が自分ではなく別の女性を好きになったのなら、陽咲と別れてからつきあえばいい。そのうえで妊娠して結婚ということなら、陽咲だってここまでの怒りを覚えずにすんだだろう。自分のなかで気持ちの整理がついていたら、おめでとうの一言だって言えたかもしれない。

双方ともに仕事が忙しくて、会社が同じにもかかわらず顔をあわせない日々が続いた。三週間ぶりに連絡をもらってこの店によびだされたときは、もしかしたら、と期待したのに。彼は気づいているのだろうか。今日が、どんな日だったのかを。彼は忘れてしまったのだろうか。この店が自分たちにとって、どんな場所だったのかを――。

「……もう、いい」

のどから声をしぼりだすようにして、陽咲は言った。内藤は竹仲の背に手をまわし、妊娠中

の相手を気遣っている。すでに彼は選んでしまったのだ。自分ではない、ほかの女性を。だったら、残された選択肢は一つしかない。

「私だって浮気するような相手はごめんよ。熨斗をつけてくれてやるわ」

こぼれそうになる涙を堪えて、せいいっぱいの強がりで見栄をはる。すると内藤はなぜか陰のある笑みを浮かべてみせた。

「……俺って、そんな程度だったんだな。五年だぜ。五年間もつきあったのに、そんな簡単にあきらめられるような存在だったわけだ」

ははは、と内藤は力なく笑い声をあげる。

「なによそれ……」

陽咲はくちびるを震わせながらつぶやいた。おまえがそれを言うな、と怒鳴りつけてやりたい。被害者は陽咲だ。それなのに、浮気をした本人が、なぜ傷ついた顔で被害者ぶるのか。しかし、よくも悪くもまだ正常に働いている理性が、爆発寸前の陽咲を押しとどめる。

「そんなことありません。聡史さんは、私にとってかけがえのない人です！」

両目にこれでもかと涙をたたえ、竹仲は首を振った。それを内藤は愛おしげに見つめる。やめて、と陽咲は心のなかで悲痛な声をあげた。どうして。その眼差しをむけられていたのは、私だったはずなのに、と。

「真莉愛は俺がいないとダメなんだ。頼られるのがこんなにうれしいことなんだって、はじめて知ったよ」

竹仲がうれしそうに頬を染めた。ついさっきまでの殊勝な態度は、いったいどこに行って

しまったのだろう。そもそも、男性に守ってもらわなければ生きていけないようなか弱い女性が、人の男を奪うだろうか。なぜそれに気づけないんだ、と陽咲はデレデレと鼻のしたをのばしている浮気男をにらみつけた。

「それに、若い子のほうが、自然とこっちも若々しくなれるっていうか――」

陽咲はありったけの力でテーブルを叩いた。ダンッ、という衝撃音に、一瞬、店内からBGM以外の音がかききえる。きゃ、と可愛らしい声をあげて、竹仲が内藤に抱きついた。そのわざとらしい仕草にも虫酸が走る。

「さようなら」

席を立って、陽咲は足早にその場をあとにした。一歩、一歩、歩を進めるたびに涙がこぼれ落ちた。一口も飲まなかったコーヒー代として、「おつりはいりません」と言って千円札をだす。

大通りに面したこのフレンチ料理店は、自分たちにとって思いでの場所だった。つきあってはじめての陽咲の誕生日に、内藤が予約してくれたのがこの店だ。もしもプロポーズするなら、この店のディナーでって決めてるんだ、とはにかむように笑った彼。陽咲もそんな日がくることをずっと夢見ていた。

それに、今日は――。

五年まえ。陽咲が彼に告白され、つきあうことになった、二人の記念日だった。

「バカみたい」

もしかして、プロポーズされるんじゃ、なんて胸をときめかせていたのに。とんだ記念日だ。

陽咲は頬を流れる涙を拭きもせず、すっかり陽が落ちてしまった街中を駅にむかって歩きだす。

まだ九月上旬だというのに、今夜は妙に冷える。昼間に雨が降ったからかもしれない。しかし、どれほど気温が低くても、頭にのぼった血をさげる効果はないようだ。

堰を切ったかのようにあふれだす涙をそのままに、ズンズンと進む陽咲に誰もがぎょっとして道を空ける。せっかくだからとバッチリきめたメイクも、いまは見るも無惨に崩れはてていることだろう。

胸が潰れそうなくらい痛かった。

同期としてともに入社した際は、その容姿もさることながら人柄のよさに惹かれた。それからしばらくして、彼から告白されたときは天にも昇る気持ちだった。私も、と震える声で返したことをよく覚えている。あれから五年だ。喧嘩したこともあったし、別れ話がでたこともあった。それを乗り越えた先にあったのが、まさかの裏切りである。

「ほんと、最悪――うわっ」

勢いよく歩いていたせいで、ヒールの踵が段差にひっかかり陽咲は前方に倒れ込むように転がった。両膝をしたたかに打ちつけ、そのあまりの痛みに思わずうめき声を漏らす。

「痛ったぁ……」

血はでていないだろうが、確実に青痣にはなっただろう。とっさについた手も真っ赤になって、ヒリヒリと痛みを訴えてくる。今日は本当に厄日だ。

立ちあがらなきゃ、とは思うものの、両足に力が入らない。濡れたアスファルトの感触に身震いして、陽咲は顔をあげた。どこか休む場所は、と視線をさまよわせると、カフェらしき店

先に置かれたレトロなベンチが目に入る。少しのあいだだけ、と陽咲は心のなかでつぶやいてそこで休ませてもらうことにした。

ベンチに座って、ホッと一息。バッグからハンカチを取りだして、涙でひどいことになっているだろうメイクを簡単に拭き取る。一息入れたことで気持ちもだいぶ落ちついたが、陽咲はなかなか立ちあがれずにいた。

はやく帰りたいとは思うものの、同時にいまは自宅に帰りたくない——一人きりにはなりたくないという気持ちもあった。部屋にある、たったいま別れたばかりの恋人の私物を見て、冷静でいられる自信がない。酒でも飲めたらいいのだが、あいにくと陽咲は下戸だ。コップ一杯のビールで気持ち悪くなってしまう。だからといって、こんな精神状態で友人の家に押しかけるのも気が引けた。

少しのあいだだけでもいい。時間を潰せそうな場所はないだろうか、と思ったとき、趣のある看板が風に揺られ、カタンと音を立てた。

〝洋菓子店アルセーヌ〟

どうやら、ここはカフェではなく洋菓子店だったらしい。明かりがついているので、まだ営業中なのだろう。

——そうだ、ケーキを食べよう、と陽咲は心中でつぶやいた。

陽咲にとってケーキは、嫌なことや辛いことを忘れさせてくれる偉大なアイテムだ。もちろんはじめて入る店なので、味の保証はない。それでも、これから馴染みのケーキ屋に行くのは億劫だし、なにより顔見知りの店員にいまの自分を見られたくはなかった。

ガラス製のドアを開ければ、鈴が軽やかな音を奏でる。
店内はシンプルで、落ちついた雰囲気を漂わせていた。出入り口のすぐ右側には円形のテーブルが三つ置かれ、イートインできるようになっているようだ。ふわりと鼻孔をくすぐる甘い匂いに、陽咲は少しだけ口元をほころばせた。
「いらっしゃいませ」
奥から出てきたのは、コックコートを着た厳つい顔の男性だった。年齢は四十代くらいだろうか。筋骨隆々とした体つきに上背もあるため、顔をあわせるだけで威圧感を覚えてしまう。ここって洋菓子店だったよね、と陽咲は思わずおもての看板を見返しそうになった。
気を取り直して、あらためてショーケースに並ぶケーキを眺める。残念なことに時刻が遅いため、カットケーキはもう数えるほどしか残っていない。
シンプルなガトーショコラ、丸いフォルムが可愛らしいオレンジズコット、宝石を集めたような七種のベリーのタルトに、パイ生地を何層にも重ねたミルフィーユ。ソールドアウトとなったケーキは、すべて名札が伏せられていた。
どれもおいしそうだ。むしろ四種類すべて注文してもいいくらいである。しかし、陽咲の目を惹いたのは、三段にわかれている棚の一番うえに置かれていたホールのデコレーションケーキだった。
サイズは四号。薔薇の花を象った生クリームの飾りを中心に、カットされた色とりどりの果物が並んでいる。もちろん、果物がふんだんに使われているため、金額もそれ相応だ。普段の陽咲ならば、羨望の眼差しをむけるだけで終わっただろう。四種類のケーキと見比べて、陽

咲は即決した。
「すみません。このフルーツデコレーションケーキをください」
「かしこまりました。おもち帰りでよろしいですか？」
「いえ。こちらでいただきます」
「では、席でお待ちください」
イートインスペースでホールケーキを食べる客なんて、滅多にいないだろう。それも複数でシェアするわけでもなく、たった一人で。絶対にあの店員はおかしく思っただろうが、陽咲は気にしなかった。
代金を支払って席につく。外から見られるのは嫌なので、一番端のテーブルに窓へ背をむけるようにして座った。たかぶった感情が落ちついてくると、陽咲は急に自分の格好が気になりだした。化粧が落ちてしまったのはしかたない。せめて、と結っていた髪をほどいて手ぐしで整え、スーツの着崩れをなおした。これでだいぶマシになっただろうと、ホッと一息つく。
しんと静まりかえった店内で、陽咲はこれからのことを考えた。
陽咲は周囲に、内藤とつきあっていることを隠していなかった。それはあちらも同じだっただろう。浅葉さんたちもそろそろ結婚かしら、などとからかい交じりの言葉をかけられたこともあったくらいだ。
竹仲は妊娠しているのだから、内藤は責任を取って結婚することになるはずだ。そうなれば、人の口に戸は立てられない。陽咲と内藤の破局のニュースは、またたくまに社内に広まるだろう。そこまで考えた陽咲は、胃痛を覚えた。憐憫の眼差しをむけられるならまだいい。口さが

ない者たちはきっと、恋人に捨てられた女だと陽咲を嘲笑するだろう。
なによりも憂鬱なのは、会社を辞めないかぎり、これからもあの二人と顔をあわせ続けなければならないことだ。仲むつまじげに寄り添う二人の姿を見せつけられる日々――想像するだけで腸が煮えくり返りそうだ。
「失礼します」
強面の店員がテーブルに、ティーカップを置いた。
「あの、飲み物は頼んでませんが……」
「当店からのサービスです」
どうやら気を遣われてしまったようだ。頬が熱くなるのを感じながら、陽咲はうつむいた。その目のまえに、大皿に載せられたホールケーキが置かれる。
「……すごい、きれい」
ショーケース越しに見るよりも華やかで、生クリームの真っ白な薔薇は花びら一枚一枚が本物と見紛うくらい立体的だ。そして、それを囲むように飾られた果物も、イチゴにはじまり、マスカットにメロン、オレンジ、キウイフルーツ、バナナにブルーベリーと多彩で、その一つ一つが宝石のように輝いて見えた。
食べるのがもったいないくらいである。スマートフォンで撮影したいところだが、陽咲はその気持ちをぐっと堪えた。いまは一刻もはやく、このケーキを味わいたい。フォークを握りしめた陽咲は、迷ったすえに外側の生クリームとスポンジ生地をフォークですくい取った。
ふわりと香る甘い匂いに、使われている食材が脳裏をよぎる。陽咲の数少ない特技の一つに、

〝嗅覚がすぐれている〟というものがあった。

就職するさいの履歴書に長所の一つとして記入したこともあるが、一度として触れられたことのない特技である。匂いを嗅いだだけで、レストランのドレッシングに使われている食材や調味料を、一つ残らず当てたこともあった。しかし、使われた食材はわかるが、実際に再現できるほどの腕はないため、日常生活の役にたったことは一度としてない。飲み会の席で、すごいともてはやされる程度である。

使われているのは、どこのスーパーにでも置いてあるような食材や調味料ばかりだった。多少、香りづけに使用されているリキュールが、陽咲の知らない種類だというくらいだろう。

一口食べて、驚く。

――いままで食べたケーキのなかで、一番おいしい。

生クリームは口当たりが柔らかく、甘さは控えめだ。しっとりとしたスポンジ生地にはアルコールを飛ばした洋酒が染みこませてあって、ほんのりとした苦みが口内に広がる。クリームの甘さと洋酒の苦みの絶妙なマッチングには、感動を通り越して戦慄を覚えるほどだ。

ハッと我に返った陽咲は、続けて生クリームとスライスされたイチゴを一緒に食べてみた。甘みのなかに広がる酸味に、思わず笑みがこぼれてしまう。生クリームの甘さが控えめなおかげで、果物のよさがしっかり残っている。甘すぎると、果物の酸味だけが強調されいまいちな味になってしまうのだ。かといって、まったく甘さのない生クリームもいただけない。この絶妙なさじ加減がじつに難しいのである。

空腹ということもあって、四号サイズのホールケーキがみるみるうちに陽咲の胃袋に消えて

いく。途中、紅茶で口のなかをリセットして、陽咲は残りのケーキに挑みかかった。
「ううっ、おいしいよぅ」
おいしいのに、涙がでてくる。ぐすっ、ぐすっ、と鼻をすすりながらも、無心にケーキを口に運び続けた。
――ガタン。
店内に響いた音に、陽咲は反射的に顔をあげる。レジの奥にあるドアが開いていたが、そこには誰の姿もなかった。強面のパティシエは不審な音に気づいた様子もなく、焼き菓子コーナーのまえに立って商品の位置をなおしている。
「気のせいかな？」
ハンカチで涙を拭き取り、あらためてクリームをたっぷりと載せたスポンジ部分を頬張る。味わうようにゆっくりと咀嚼して飲み込めば、ふわりと広がる甘さに思わず頬が緩む。
――そういえば、小学生のころの夢はケーキ屋さんだったっけ。
ケーキ屋になれば、毎日のように大好きなケーキをたくさん食べられる。そんな単純な理由から、陽咲はパティシエという職業に憧れた。でも、お菓子作りは難しく、自分で作るよりも買って食べたほうがはるかに楽だと気づいてからは、もっぱら店の開拓にいそしんできた。
「こんなにおいしいケーキのお店で働けたら、幸せかも……」
ふたたびケーキに集中しようとして、陽咲はふと壁の貼り紙に目を止めた。
〝店員募集。ホームページや広告、店内レイアウトが得意な方大歓迎〟
はじめはアルバイトから。その後、正社員での雇用もあり、と書かれていた。もしも自分が

学生だったら、一も二もなく履歴書を持参しただろうな、と陽咲は思った。いまでも少し心惹かれるものがあるが、やはり安定した職業は捨てがたい。

職場のことを思いだしてしまった陽咲は、週明けを憂鬱に思いながら残り少なくなってしまったケーキを口に運ぶのだった。

第一話　チョコレートムースケーキは万年筆から

思いでのレストランで恋人にフラれてから一ヶ月と半。暦はもう十月も半ばだ。

まさかこの歳で転職する羽目になるなんて、と陽咲は自嘲する。予想通り破局の一報は、社内にまたたくまに広まった。

内藤と竹仲が、それぞれの上司に入籍と妊娠の報告をおこなったからだ。よりによって、彼らはあの翌日に婚姻届を市役所に提出したらしい。陽咲に別れを告げるよりもさきに、互いの両親に結婚の挨拶をしていたというのだから、さすがに開いた口がふさがらなかった。

順番がおかしい。いや、それを言うならば、まずは陽咲と別れてから竹仲とつきあうべきなのだが。

それからだ。陽咲にかんする、ありもしない噂が流れるようになったのは。いつの間にか内藤はかなりまえに陽咲と別れていたらしい。さらに内藤に未練がある陽咲が、新たにつきあいはじめた竹仲に対し、陰険な嫌がらせをしていたことになっていた。

仲のよい同僚が調べてくれたところ、噂の出所は竹仲本人だった。ありもしない話を、まことしやかに語っているのだそうだ。あんな殊勝な態度で恋人を奪ったことを謝罪していたにもかかわらず、社内では自分が被害者のように装う。いったいどこが弱いんだと、陽咲は元恋人に問い質したくなった。

もちろん、社内の全員がその噂を鵜呑みにしたわけではない。

同じ部署の同僚たちは、口々に同情とはげましの言葉をかけてくれた。なかには内藤と竹仲に文句を言ってくる、と憤ってくれた者までいたほどだ。しかし、可愛らしく人当たりのよい竹仲の味方につく者も多く、失恋の心労も重なり、陽咲は精神的に不安定な日々を送らざるをえなくなってしまった。

それが仕事にも影響をおよぼしはじめたとき、陽咲はすっぱりとあきらめることにした。決断のはやさは自分の長所であり短所でもあった。もっと熟考すべきなのだろうが、こうと決めたら一直線である。

上司に辞表を提出して、その半月後には七年半勤めてきた会社を退職した。本来ならば引き継ぎにもっと日数がかかるはずだったが、陽咲の心情をおもんぱかってくれた上司や同僚たちのフォローもあって、最短で会社を辞められたのである。

ハローワークで失業保険の手続きをして、これからどうしようかと考えたときに思いだしたのが、洋菓子店の求人募集の貼り紙だった。時給は安いかもしれないが、好きな場所で働いてみるのもいいかもしれない――。

幸いにも店員募集の貼り紙はそのままだった。履歴書を郵送して、四日後に面接を受けた。面接官はあの強面のパティシエだ。よほど応募者がいなかったのか、その場で採用が決まった。

今日ははじめての出勤である。開店は十一時、いまはちょうど十時だ。

陽咲は肩まで伸ばした髪をお団子にして、頭を可愛らしい白いレースの三角巾で覆うようにしばる。服装は、膝下までのシンプルな黒いワンピースに、三角巾とお揃いで作られた白いレ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。